

大沼ラムサール協議会の5年間の活動とこれからの展望

○吉田浩平・池田誠・金澤晋一 (大沼ラムサール協議会)

kouhei_yoshida@town.nanae.hokkaido.jp

1. 大沼ラムサール協議会について

北海道の南部に位置する大沼は、2012年にラムサール条約湿地に登録された。登録と同時に、地域住民や商業者、環境保護団体等で構成される大沼ラムサール協議会が発足した。当協議会は、「豊かな自然を保全し、恵まれた環境を後世へ永続的に引き継ぐこと」を目的とし、様々な活動を行ってきた。

2. 大沼ラムサール協議会の活動とその変化

設立当初は、水質の問題、特にアオコ発生の原因究明を主に議論が進み、会議は閉塞的になり、参加する会員も少なくなっていた。

そんな中、最近では、水質の問題だけでなく生物多様性に関する活動や地域住民の参加を促すような活動も行われるようになってきた。主な活動としては、日本最北に棲息し、世界的に見ても最も寒冷な地で生息するといわれている特定外来種であるウシガエルを中心に外来種についての普及啓発活動が行われた。さらには、大沼に関わる昔の写真を今の風景に重ねる時層写真や大沼の魅力や観光スポットになり得る場所(本協議会では“Lovely Point”と呼称)を自由に書き込める LocalWiki、大沼流域に住む小学生を対象にした大沼ラムサール隊の活動、大沼に関わる研究者が毎年の成果を地域に還元する場を提供し、地域住民と研究者の意見交換を図り、研究者への理解を深める活動などワイズユースや CEPA (Communication, Education, and Public Awareness) に関わる活動が行われるようになった。

また、閉塞的な会議を打破するために、外部からの様々な分野の有識者を会議に招き意見を仰ぐことも行ってきた。一部の有識者においては、会議に参加したことをきっかけに大沼での活動を始め、まちづくりに関するワークショップの開催が検討されている。

自然保護分野では、5年程開かれていなかった、大沼環境保全対策協議会の会員となり会議を再開させ、第3期大沼環境保全計画の策定に貢献した。今回の計画では、水質改善に関わる分野以外にも外来種対策や教育や普及啓発に関わる文言も多く掲載し、当協議会が担当することになった。

3. 今後の展望

このように設立から5年を迎え当協議会は、様々な角度から大沼に接する活動を行なえるようになった。本発表では、当協議会が行ってきた活動の事例を紹介し、今後の活動の展望について発表する。

キーワード：大沼, ワイズユース, CEPA, ラムサール条約,